

近松秋江「骨肉」論

——「悲しみの薄らぎ」と「孤独」を生んだ背景——

佐々木 清次

はじめに

「骨肉」は、一九一一年（明治四四）年、秋江が三五歳の時、『新潮』三月号に発表された。主人公「京太郎」は、三番目の兄「録」の死んだ知らせを受け、東京より、実家のある岡山へと帰る。そこで主人公が感じたことは、昔、父親や次兄が死んだ時と違つて、周囲の血縁関係の人達や近所の人々の悲しみ方が薄らいでいることだつた。主人公の心は違和感を持ち続ける。そうした違和感を理解するには、秋江の家族の歴史を辿ることによつて可能になる。一方、母親らに墓を見に行くことを誘われても、主人公は一人で家に残る。主人公の心の中にあるものは「孤独」以外の何物でもない。これは、そうした家族と秋江自身との微妙な心のズレから生じたものではないか。こうした三兄の死に対する悲しみの薄らぎや、主人公自身が感じる孤独を、幾つかの作品を参考にしつつ、秋江の家族の歴史も絡めて明らかにして見たい。

第一章 「骨肉」のテーマ（「兄弟」と比較して）

近松秋江と言うと、小説「別れたる妻に送る手紙」「疑惑」「黒髪」の作者として有名で、いわゆる逃げた妻や遊女への未練や追跡を克明に描いた作家である。それらは、秋江の身辺に題材をとつたものであり、場所も東京や京都が中心である。「骨肉」は、タイトル通り、秋江の家族を描いたものであり、場所も故郷岡山である。「別れたる妻に送る手紙」が『早稲田文学』に連載されたのが、一九一〇（明治四三）年四月から七月にかけてなので、「骨肉」が書かれたのは、ほぼその一年後ということになる。「骨肉」発表の三ヶ月後には「伊年の屏風」と言つて、故郷の長兄とのやりとりを描いた小説を『太陽』に発表し、八ヶ月後には「生家の老母へ」と言う、秋江の近況を書簡体にとめた作品を『文章世界』に発表している。この時期の秋江は、東京での私生活の出来事のみならず、故郷岡山での家族との関係を描いた作品

も書いていたと言える。

「骨肉」においては、三兄の死に対する悲しみが取り扱われている。その悲しみ方が過去と現在とでは大きく変化が見られることに對する主人公のやるせなさ^{せなさ}が描かれる。「今は自分の心が俗世の塵に染み、情けの色が褪せた所為か、昔のやうに心のありたけ死んだ者を悲しむことの出来なくなつた」と主人公は告白する。母は「今度のことは、新しい鋭い力を以つて此の老体に食ひ入ることが出来ない」状態である。「仏前も何だか寂しい」と感じる。父や次兄の死んだ時と比較して、今度の葬儀に関しては、「生死といふことが、弄ばれてゐるやうに」考える。「養母」が「借家の男」と「餅を引張り合つて」いるのを見て「私」は無性に腹を立てる。主人公の思ひは、「母や姉の傍で其等の悲む心と自分の悲む心とを思ふま、打明けたのでなければ、此の兄の死を悲むに不足を感じた」とあるやうに、三兄の死を父や次兄の時のように家族と共に悲しみたいという方向に傾いてゆく。心は時間的に過去へと結び付いて行く。

「骨肉」の同時代評としては、一九一一（明治四四）年四月一日の『ホトトギス』（第十四卷八号）で発表された「三月の評論」（宮本和吉）と、同年同月同日の『新潮』で発表された「三月の重なる創作 骨肉」（作者不詳）がある。前者では「徳田秋江氏の『骨肉』は面白かつた。シンミリする書振である。年が行くと骨肉が死んだ時にも存分に悲しめないといふやうな事を書いたものである」とある。後者では、主人公が、周囲の人々に対して、

兄の死に對して悲しまないのが、その「訴へるやうな、泣くやうな、叙情的の気分が、読者の胸に浸み込んで来る」と評した。共に、悲しさの度合いについて考察されたものであり、殊に前者では、年齢という時間的経過が悲しみの感情を薄れさせることに對して言及している。なるほど両者とも「骨肉」のテーマを言い得ているのであるが、こうした悲しさの薄れを言うには、それに至る家そのものの歴史的過程に当然触れねばならず、さらに、主人公と故郷の人々との間に出来る感情の溝、つまり主人公の心に生じる孤独感にも触れなければならぬと考える。そこで、「骨肉」の孤独感を言うために、他の同テーマの作品と比較することとする。

秋江が、この三兄の死を取り扱つた作品は、「骨肉」以外に「兄弟」があり、一九二二（大正五）年九月『太陽』に発表した。秋江三七歳の時の作である。一九〇七（明治四十）年にあつた三兄の死去のことを、四年後及び五年後と、二回発表しているわけである。これら兩作品における登場人物名と、実在した人物名をまとめたのが次の表である。

「骨肉」	「兄弟」	実名	備考
父 姉「このま」 長兄「基」	「このま」 朔 次兄	啓太 九重 元作 国治	一八九四明治二七十一月死去
三兄「録」	小山 録	利久治	残す 一八九六明治二五死去 幼児陽郎 一九〇七明治四十七年九月 米國にて 客死
主人公「京太郎」 姉の夫「新」	照爾 清	近松（徳田）秋江	

表からわかることは、姉の「このま」と三兄「録」以外は、両作品の間で名前の変更があるということである。「録」は、小説の中心人物なので、そのまま名前を変えなかつたものと思われる。

この両作品を比較してみると、「兄弟」が「骨肉」の倍ほどの量であることがわかる。描写だが、「骨肉」になくて、「兄弟」に追加されたものに、亡兄のエピソードと最後に主人公が帰京する際の姉と近所の女房との会話がある。「兄弟」では、タイトルが示す通り、特に「亡兄」の生前のことを描くことが主眼であった。そこには「亡兄」への追悼の意を表する意図もあつたであろう。姉と近所の女房との会話の方は、これを聞いて主人公が故郷に自分の居場所がないことを自覚したことを強く印象づけるためではなかつたかと考えられる。つまり、主人公の孤独感が浮き彫りとなるのである。「骨肉」は、亡兄に対する周囲の悲しみの薄らぎに秋江が違和感を抱いたことがモチーフになつたのは明らかで

あろう。そこに、作者の故郷そのものの喪失感に通じるものがあるととも言える。

「兄弟」では、一九二二（大正元）年十月一日の「文章世界」（博文館）における「九月文壇の印象評」（破天郎）の同時代評がある。そこでは「異国で死んだ兄の白骨を中心として、一家それぞれに自分の自己と云ふものに押し固まる、浅ましい、醜い人性相を有るままに、精刻に展開して居る。」と述べている。ここで言う「醜い人性相」とは、母や養母等の、亡兄への悲しみを存分に表明しきれない人々の様子を言つたものであろう。しかし、「自己と云ふものに押し固ま」つたのは、主人公自身もそうであり、それが周囲の人々との間で孤立する所にも言及する必要があると考える。

「骨肉」において、主人公の心は孤独である。期待した悲しみが母にも養家にもない。主人公は、頑なな気持ちのまま、母に墓に参ろうと誘われるが、一人残る。主人公の心は「東京に帰つて何をしよう？心の目的がない」と感じる一方で、故郷においても、一人取り残される。心は一人寂しく宙を彷徨う。これは、過去に戻れぬことから来る孤独感を味わう姿そのものであると言えよう。この孤独感の背景としてあるのは、時間的な原因によるものばかりでなく、空間的な隔たりといったものがある。東京にいる主人公と、岡山にある実家という距離は、主人公と実家の者との心を確実に隔ててしまつたであろう。新橋から山陽線で実家へ汽車で帰るにしても一日かかる時代である。実家のある藤野から、

亡兄の養家のある岡山まで汽車で一時間かかる。その兄自体が「シアトル」で死亡し、遺灰は太平洋を船で渡り、横浜より「二百里」の距離を汽車で戻って来ている。姉も嫁ぎ、藤野の近くの「三石」に住んでいる。母と長兄以外は、家族という枠組みを離れ、空間的に移動している。この空間的な距離自体が、家族で一人の肉親を悲しめない遠因となったのであり、主人公をして孤独を感じさせたと考えられる。

ここで、「骨肉」のテーマと言える主人公の孤独について、違う角度から見て行きたい。「作品の中の人世観（人生の出しやう）」（『新潮』一九一一年（明治四四）年三月一日）に次のように秋江は述べている。

私は幾十萬とも数知れぬ人類が、種々なことで、それぞれ千態萬様の愉快と希望と苦勞と心配とを胸に抱いて生を営んでゐるその悲劇を以つて題材とするのが、真個に小説らしい小説だと信じてゐるのである。（中略）複雑極る世相——小説の材料——の中から作者自身の別天地を創造する處に作者の——六ヶ敷言へば人世観といふものがあるので、作者の個性も其處に自から表はれる。

この秋江の言説による前半の「悲劇」こそ、「骨肉」で言うところの、主人公の孤独そのものであろう。また、小説においてこの「材料」を選択するかは作者の力量が出るとの意見について言

えば、故郷への帰省での出来事こそが、秋江が最も小説の材料として描きたかったとすることは、それが二度までに小説として発表されたことで証明されるものである。そこに秋江の並々ならぬ創作意欲が存在するのであり、決して秋江にとつて軽視できぬ作品として評価出来る点と言えよう。

第二章 「骨肉」の背景及び「徳田家」の歴史的背景

ここで、「骨肉」が描かれた当時の秋江について触れたい。「年譜」によると、秋江は、一八七六（明治九）年五月四日に、父徳田啓太、母奈世の四男として岡山県和気郡藤野村に生まれた。徳田家は代々農家であったが、「滝の舎」という酒造業を兼ね、父の啓太は友人との共同出資で岡山に米穀取引所も開設するといふ、いわば村の旦那衆の一人であった。七歳の時には、老師について漢学を学んだという。十一歳の時には、英語を学び始めた。最初はその気はなかったが、中学に入学してから、やっと学問に身を入れる気になった。その後十八歳の時、政治小説を耽読し、やがては「人間としての価値を意義あらしめ」る「文章家たらん」（私は生きてきた）中央公論・一九二三（大正十二）年九月）と念じ、その実現のために九月に書き置きして上京、慶應義塾に入學した。しかし、父の死去で帰郷せざるを得なくなる。しばらく家業を手伝っていたが、文学に親しみ、二十一歳の正月、次兄国治が幼児を残して死去したのを機に生家に戻ったが、母親の理解

を得て再度上京する。このように秋江は元々家そのものの重圧に迫られることなく、比較的自由な身でいられた。二二歳には、東京専門学校（現早稲田大学）の文学部に入學した。三兄が死去した時には、郷里の長兄元作から資金を得、二七歳の時知り合った大貫ますと共に、神楽坂の赤城元町にささやかな小間物店「藤の屋」を開いて、「ます」に自活の道を与えていた。と同時に、若い女を二階に住ませ、二人の女と一つ屋根で住むという無軌道ぶりを發揮していた。その年の九月に、三兄利久治がアメリカで客死するのである。

これら秋江の行動には、父や兄の庇護の下に、文学で身を立てるため故郷を後にすると言った所が見られる。ただ秋江が、帰郷しなければいけないことはしばしばあった。三兄の死んだ一九〇七（明治四十）年の時点では、父と次兄は死に、長女は「三石」に嫁ぎ、長兄は藤野において家業を継いでいた。母はこの兄と同居している。三兄は養子として岡山に住んでいて、一時は、アメリカへ渡航していた。「兄弟」にあるように「父親の亡くなった時も、先の兄の亡くなった時も、私の実家はまた母の世であった」と言う。秋江の胸にあったのは、郷里の母を中心とする家族であったのであり、三兄の亡くなった時には、その葬儀の場は養家であり、しかも母はすでに「慰み半分分の客の来たもの、やうに改まつてゐ」、すでにこの時に家族というまとまりはなかったと言えよう。

秋江が上京したのは、一八九五（明治二八）年だが、この時代

に限らず、文学で身を立てるべく、家出する作家はいた。例えば、志賀直哉が尾道へと旅立ったのは、一九一二（明治四五）年のことである。父から資金をもらい、東京より西へ向かった。直哉の場合は、父という存在が実家にあり、必ずしも、実家の雰囲気を変化したことはないであろうが、家というものが、息子達の家出によって成立し得なくなっている状況は確実に進行していた。同じく明治四五年のことと言えば、夏目漱石の「こころ」にも、長男や次男が仕事や勉強のために、家を出てゆくのを「父」が嘆く場面がある。時代は下るが、網野菊などは、大正四年に、日本女子大学校に入學している。これなども、親に相談なしに受験したものだ。現在もそうであるが、明治・大正時代より、家族という枠を踏み越えて、たとえ長男長女であろうと、半ば勉強のため、半ば文学で身を立てるために、家を出ると言うことが公然と行われていた。

ここで秋江の帰郷がいつ、いかなる場合になされたかを「自作年譜」で見えてゆきたい。

第一回目の帰郷（秋江十九歳）

明治二十七年二月（市立商業高校）受験。学課は最も優良の成績なりしも體質虚弱の故を以て入學を許されず。即ち悲観して、直ちに行李を整へて帰郷す。

第二回目の帰郷（秋江十九歳）

明治二十七年十一月二十日の夜国許より「チ、ベウキススグカヘレ」の急電に接し、倉皇行李を修めて帰国すれば、父既に亡し矣。

第三回目の帰郷（秋江二十一歳）

明治二十九年一月五日、次兄国治肺炎にて没す。予も亦た病弱の故に岡山市より郷里に帰り住む。

第四回目の帰郷（秋江二十二歳）

翌三十年一二月の頃移りて麴町五番町に下宿す。その年五月の頃又病弱の故を以つて帰郷す。

第五回目の帰郷（秋江二十二歳）

内幸町の長与胃腸病院に入院後、明治三十年十二月の末退院して東京在学の希望を断ち、郷里に帰る。

以上、秋江の十九歳から二十二歳の四年の間だけでも実に五回の帰郷があった。その原因は、父・兄の死の他は病弱というもの

である。こうした肉親の死というものが、秋江に帰郷を余儀なくさせたことは、「骨肉」において三兄の死により帰郷したことも共通する。また病弱ゆえ帰郷せざるを得なくなったことに關しては「田舎の友」に「少し身体が障が^{がまん}あったり、何とはなくたゞ生活の単調を感じて来たりすると、耐忍の勇氣もなく居場処を更へたり、故郷に帰つたりして見る性情があつた」と書いている。秋江にとって、家というものが重庄としてのしからず、比較の出やすい雰囲気があつたと同時に、病弱ゆえに戻れる場所として存在したと言える。

一方で徳田家（近松家旧称、筆者注）の家運が傾いていった経緯について触れたい。まず父が存命中の頃、秋江がいかに母に甘えて育つたかについては、次の一文^⑩によつてわかる。

その頃末っ子の私は片時もははの傍を離れてゐることが出来なかつた。一夜といへども母の懷に抱かれて、なければ眠ることが出来なかつた。

ここで幼児期の秋江にとつて母というものが甘える対象であつたということがわかるが、それはいわば家というものが後々の秋江にとつて郷愁を感じる場所としての存在したと考へても良い。

父の死が家運を衰退させたことは、次の一文^⑪に見える。

室田（秋江のこと、筆者注）の父といふのは、なかなか聡

明な男らしい人間でしたから父親の存命のころは、家の中はその重量で納まつてゐましたが、それが死んでからはどうも後がうまくゆきませんでした。

とある。つまり、父という存在は近松家では大きいものであった。そして、その死は近松家の衰退の始まりを示す出来事だったのである。「はらから」には、父・祖母・祖父・姉の夫らの死が描かれているが、これらの死は、近松家を確実に衰退させたに相違なからう。

残された母はどうであつたか。「金魚」には長男の嫁といさかいを起こす姿が見える。また、「その頃の母は、つまり悲むにも憤るにも非常に強い元気がありました」とある。父が亡くなつた当初は、まだ人と争つたり、死を悲しんだりする力は有していたものと思われる。それが「他家へ養子にやつてゐた俸が死んだ時分には母はもう悲むさへ十分力が入らぬかのやうに見受けられました」とある。また、病後の母が嫁姑問題で争う氣力が失せ、逆に嫁に世話になる様子が描かれている。これらの現象は、母の、老衰による氣力の衰えによるものと言つて良い。「骨肉」における母の悲しみの薄らぎも、まさにその理由からだった。

ただその背景には父や兄の死がそれを早めたことは明らかであり、長男が嫁を迎えたことにより、嫁との争いが増え、神経をすり減らせたことは推測できる。さらに、次兄の死の時は「私の兄（二番目の兄、筆者注）の死は非常に母の心を傷めました」と

あり、その時「裏の姥さん」に母は「三年経てば大分薄らいで来ます」と慰められている。この次兄の死によつても、母の、肉親の死を悲しむ力は弱まつて来たと思ふのが妥当であろう。「骨肉」において、「その時は母もまだ五十六で、元気が好かつた。悲みを憤るほどの氣力があつた」とあるが、「骨肉」を書いた時点には「悲みを憤るほどの氣力」は弱まつていつたと考えて良い。

長男に関しては「骨肉」においても存在感薄い。この長男元作は、父亡き後も農業よりも商業の方に力をそそぎ一定の財産を得たようだ。秋江自身たびたび長男にお金を無心してしたこと、書簡によつて知られる。父亡き後、一家の大黒柱として経済的には自立してはいたが、寡黙で人間としての存在感は薄いと云う印象は否めない。父の死後、母の代となるが、その母も老衰により、威厳が保てなくなり、家運が衰退するのである。その衰退の時期にこの「骨肉」という作品は位置する。

秋江自身は長男元作にお金を無心する際、以下のような一文を書簡にしたためた。「徳田家の家名を出す者は小生一人だから」ここには作家としての名声を残そうと言ふ氣概が感じられるが、秋江の心の中には徳田家の四男として長男と共に家を守ろうとする意識はあつたのではないか、と思われれる。父母を中心として思ひ出深い故郷は上京した秋江の胸の内には決して消えることのないものとして存在し続けたであろう。それは病氣や死の度に帰郷したことで一層強められた。してみれば、かの「骨肉」において、母の悲しみの強かつた頃を懐かしんで描いたことは、母の老衰に

より家運が傾きつつある家そのものへの鎮魂歌と見て取れなくもない。父が存命中の、あるいは、母が強かった頃の徳田家が秋江の心の中に存在していたと考えて良い。

当時、秋江には「別れたる妻へ送る手紙」を書いて小説家としての名を成しつつあった。自分も長男と共に徳田家を支える男としての気概はあったであろう。ただ現実の母を中心とする家族そのものは衰退をきたしていた。長男も期待するだけの威厳はない。してみれば、秋江一人空回りして、孤独な魂を弄ぶしかない。ついには再び帰京せざるを得なくなるのである。そうした作品の構造が「骨肉」には垣間見られる。

終わりに

「骨肉」「兄弟」において、亡兄の死に対する母の悲しみの薄らぎに主人公はたまらない寂しさを感じた。また、周囲の人間との感情の溝に深い孤独を感じた。秋江が「骨肉」に描きたかったところのものは、実は家や家族の歴史的衰退という背景の下で生まれたものであったと言える。両作品は、喪失された家族といったものへのノスタルジーを結実させたものとして、秋江文学の中でも特筆すべきであると考ええる。

(1) この「京太郎」という名前は、「伊年の屏風」の主人公にも使われている。

(2) 亡兄の渡航までのエピソードや、シアトルでの状況や死んだ時の様子などが、かなりの量で描かれている。

(3) 「兄弟」の最後の会話場面は、次のようにある。

「その内何日であったか、隣家の女房が、義姉に『照さんは、今度は大分御逗留のやうですなあ。何時お帰京りですか。』と、何かの世話の序に言つてゐるのを聞いた。『さあ、何時帰京かえるんですか。今度は、随分永くおます。』義姉の返辞も耳に入った。』

(4) 「日本文学全集」45近松秋江・葛西善蔵集年譜と、「近代文学研究叢書54」（昭和女子大学）「近松秋江」一生涯を参考にした。

(5) この「ます」が後に家出し、名作「別れたる妻に送る手紙」が生まれた。

(6) 「こころ」の「両親と私」の七において、次のような場面がある。

「小供に学問をさせるのも、好し悪しだね。折角修業させると、その小供は決して宅へ帰つて来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するために学問をさせるようなものだ。」

学問をした結果兄は遠国おんごくにいた。教育を受けた因果で、

私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかった。永年住み古した田舎家の中に、たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより、淋しいに違いなかった。

(7) 『現代小説全集第十二巻』新潮社・大正十四年十一月七日。

(8) 明治四二年四月一日(『新文林』第二巻第四号)発表、のち「地方の人」と改題のもの。

(9) 「はらから」(大正五年七月『ホトトギス』第十九巻十号)

(10) 「金魚」(大正五年八月『婦人公論』)

(11) 以下の引用は「墓域」(『新潮』大正四年十二月一日)に拠る。

(12) 「骨肉」における「兄」の登場の場面は「停車場の鳥屋で長兄に会ったが、男同志のこと。困ったことになった。」と言ったきり、亡兄は何も言はない。」の場面のみ。

(13) 「一地方の名士」(『近松秋江研究Ⅱ号』平成元年十二月一日・太秦文庫)

(14) 明治四三年十月二十六日 徳田元作宛

(ささき・せいじ 大阪学院大学高等学校教諭)